

名古屋市
強度行動障害者支援事業
事例報告集

困った行動は困っているサイン！

もくじ

名古屋市強度行動障害者支援事業 事例報告集

まえがき	1
------------	---

第1章 名古屋市強度行動障害者支援事業の取り組み

名古屋市強度行動障害者支援事業の制度概要について	2
--------------------------------	---

第2章 事例紹介

第2章では、実際に専門支援員が派遣訪問で関わった事例を紹介しています。事例については、実際に専門支援員が関わったプロセスについても詳細に記述しています。強度行動障害者の支援にお困りの事業所や、今後、派遣事業を利用したいと考えている事業所の皆様に参考にいただければと思います。

① ごみを長時間拾い集め、トイレに物を詰まらせてしまう利用者への支援	6
【男性 知的障害 / 自閉症 愛護1度 障害支援区分6】	
② 頻繁に混乱して暴れ、大声や他害のある利用者への支援	10
【男性 知的障害 / 自閉症 愛護3度 障害支援区分6】	
③ 汚染行為を頻繁に繰り返してしまう利用者への支援	14
【男性 知的障害 / 自閉症 愛護1度 障害支援区分6】	
④ 靴の交換を何度も要求する利用者への支援	18
【男性 知的障害 / 自閉症 愛護1度 障害支援区分6】	
⑤ 机や壁に激しく頭をぶつける自傷行為、 扉を強い力で閉めてしまう利用者への支援	22
【男性 知的障害 / 自閉症 愛護2度 障害支援区分5】	
⑥ 大声で叫ぶ、事業所に入れない利用者への支援	26
【女性 知的障害 / 自閉症 愛護1度 障害支援区分6】	
⑦ 食事や食器を投げてしまう利用者への支援	30
【女性 知的障害 / 自閉症 愛護1度 障害支援区分5】	

参考資料

・ 支援のヒントシート	34
・ ストラテジーシート・冰山モデル	35
・ 強度行動障害者の支援に係る本市のその他の取り組み	36

強度行動障害者専門支援員の紹介

まえがき



強度行動障害とは、激しい他害や自傷、こだわり、破壊などの行動が頻発し、日常生活で特別に配慮された支援が必要な状態にあることをいいます。このような強度行動障害のある方（強度行動障害者）の支援と聞いて、皆様はどのような印象を持たれるでしょうか。激しい自傷や他害などの行動を通して本人が何を伝えようとしているのかを受けとめることができず、対応に困っている方もいらっしゃるかもしれません。

強度行動障害者の数が年々増加する中、国においては障害福祉サービスの報酬に強度行動障害者支援に係る加算が創設され、本市においても独自に人件費補助を実施してきましたが、受入が十分に進んでいるとは言い難い状況です。また、実際に受入を行っている事業所からは、支援に大変苦慮しているとお聞きしています。厚生労働省の「令和2年度障害者虐待対応状況調査」によれば、被虐待者890人のうち30%以上が行動障害のある方であったと報告されています。

こうした中、本市は、2017年度より、強度行動障害者の支援に係る総合的な事業として『名古屋市強度行動障害者支援事業』を開始しました。この事業の一つとして、「強度行動障害者専門支援員派遣事業」を実施しています。これは、強度行動障害者の支援に苦慮する事業所に対して、専門的な知識や技術を習得した専門支援員を派遣し、事業所職員と協働して、行動障害の軽減につながる支援方法の検討や知識・支援技術の向上を図る取り組みを行うものです。

本書では、この事業の紹介とともに、今日までの数多くの派遣実績の中からピックアップした支援事例を、報告集としてまとめました。目次には、事例紹介のタイトルとして様々な「行動問題」が並んでいます。これらは、専門支援員が関わった事例のごく一部ですが、多くの現場で聞かれる事例でもあるのではないのでしょうか。皆様が現に対応に苦慮されているケースと、同様の事例もあるかもしれません。

専門支援員は、行動問題がなぜ起きるのか、その要因を本人に関する記録や情報、観察から探り、推察し、紐解いていきます。そして、本人の強み・弱みといった特性にも注目しながら、職員とともに、本人の特性に応じた具体的な支援策の検討と実践につなげていきます。

その結果、ほんのちょっとした環境の整備や本人への働きかけの工夫により、行動問題が大幅に減少することがあります。一方で、地道に何度も繰り返し支援することで、数週間、時に数か月を要して、ようやく一つの行動が減少することもあります。いずれの場合も、支援の近道があるわけではありません。記録を取り、分析し、本人に対する理解を深めて実践すること、そして職員が一丸となって対応していくことが重要です。

専門支援員は、行動障害を軽減させる魔法使いではありません。また、専門支援員が直接的に本人に対する支援を行うわけではありません。実際に支援を行うのは現場の職員であり、専門支援員ができることは、職員が支援の糸口を見つけるための後方支援に限られます。しかしながら、こうした取り組みが、一歩ずつでも本人の行動障害の軽減と職員の皆様の負担軽減につながることを心から望んでいます。

強度行動障害者は「困った人」ではありません。「本人も困っている」ということを、決して忘れてはなりません。この事例集が現場における支援の一助となり、本人も職員も皆が安心して幸せに暮らせる社会の実現に寄与することができれば幸いです。

本市の強度行動障害者支援事業は、他都市からも少しずつ注目され始めており、誇れる事業の一つであると自負しています。今後も、より多くの事業所の皆様に本事業をご活用いただけるよう真摯に取り組み、更なる施策の充実に努めていきたいと考えています。

末尾にはなりますが、日々、障害福祉の現場でご尽力される職員の皆様と、本書の作成にご協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

名古屋市強度行動障害者支援事業の 制度概要について

名古屋市強度行動障害者支援事業事務局

名古屋市強度行動障害者支援事業は、強度行動障害者（※）に対する高度な専門知識・支援技術を習得した「強度行動障害者専門支援員」の派遣を始め、事業所からの相談窓口の設置や事業所職員向けの研修など、強度行動障害者支援にかかる総合的な事業を実施しています。この事業は、名古屋市知的障害者福祉施設連絡協議会（通称「名障連」）が名古屋市からの委託を受けて実施している事業です。主に(1)「専門支援員養成事業」(2)「専門支援員派遣事業」(3)「相談支援事業」(4)「養成研修事業（基礎・実践研修）」の4つの事業を柱としています。

※『強度行動障害者』とは、自分の体を叩いたり食べられないものを口に入れる、他人を叩いたり物を壊すなど、本人や周囲の人のくらしに影響を及ぼす行動が著しく高い頻度で起こるため、特別に配慮された支援が必要になっている状態にある方のことです。

(1) 強度行動障害者専門支援員養成事業

強度行動障害者に対する一定の支援経験を持つ事業所職員に、国立のぞみの園での指導者研修やTEACCHプログラム等の研修受講を通して、強度行動障害者に対する高度な専門知識、支援技術を習得していただき、事業所へ派遣する専門支援員の養成を行っています。2021年度までに5名の専門支援員を養成しました。専門支援員の養成に関しては、事業の実施状況を見ながら今後増員をしていくかどうか検討をしています。

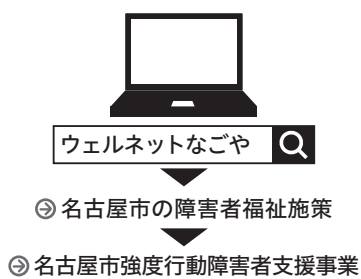
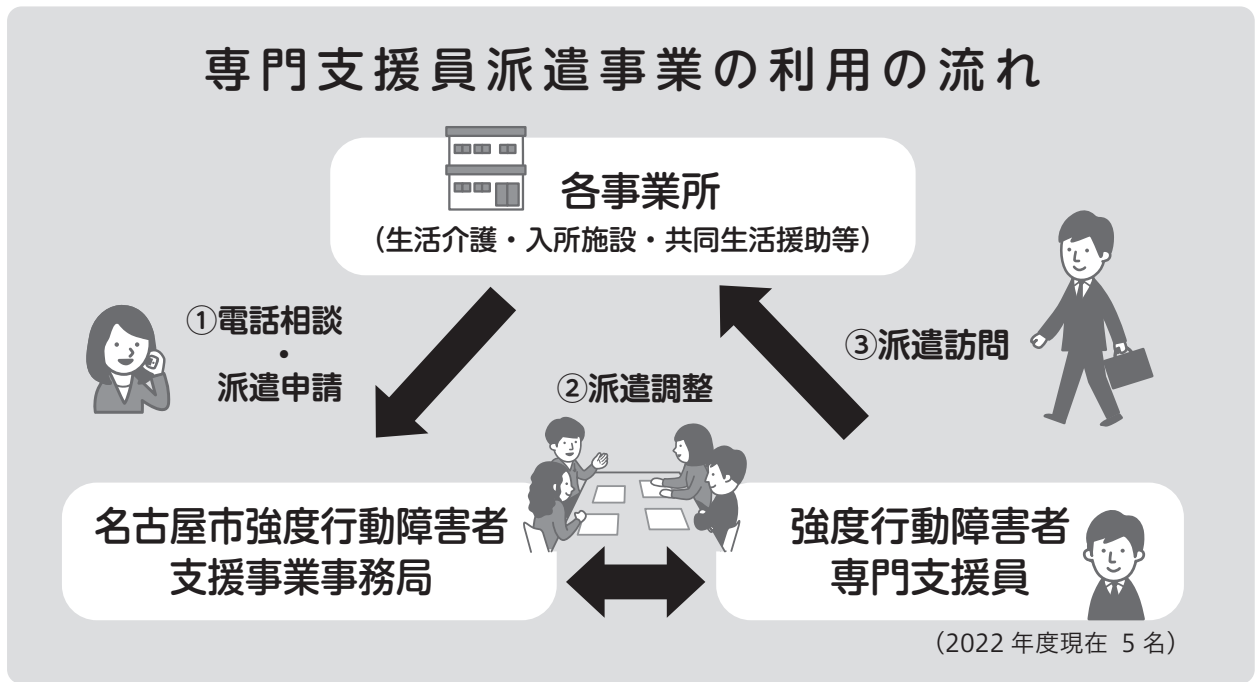
(2) 強度行動障害者専門支援員派遣事業

対応困難な強度行動障害者の支援などにお困りの事業所に対し、専門支援員の派遣を行っています。派遣される専門支援員と事業所職員の皆様とが協働して、対象利用者の支援方法を考えることにより、行動障害の軽減と職員の皆様の知識及び支援技術の向上を図ることを目的としています。

< 専門支援員派遣事業の利用の流れ >

事業所からの派遣申請に基づいて専門支援員が派遣されます。日程や時間等は派遣先の事業所の希望に合わせて調整しています。派遣に関わる費用は無料です。

専門支援員派遣事業の利用の流れ

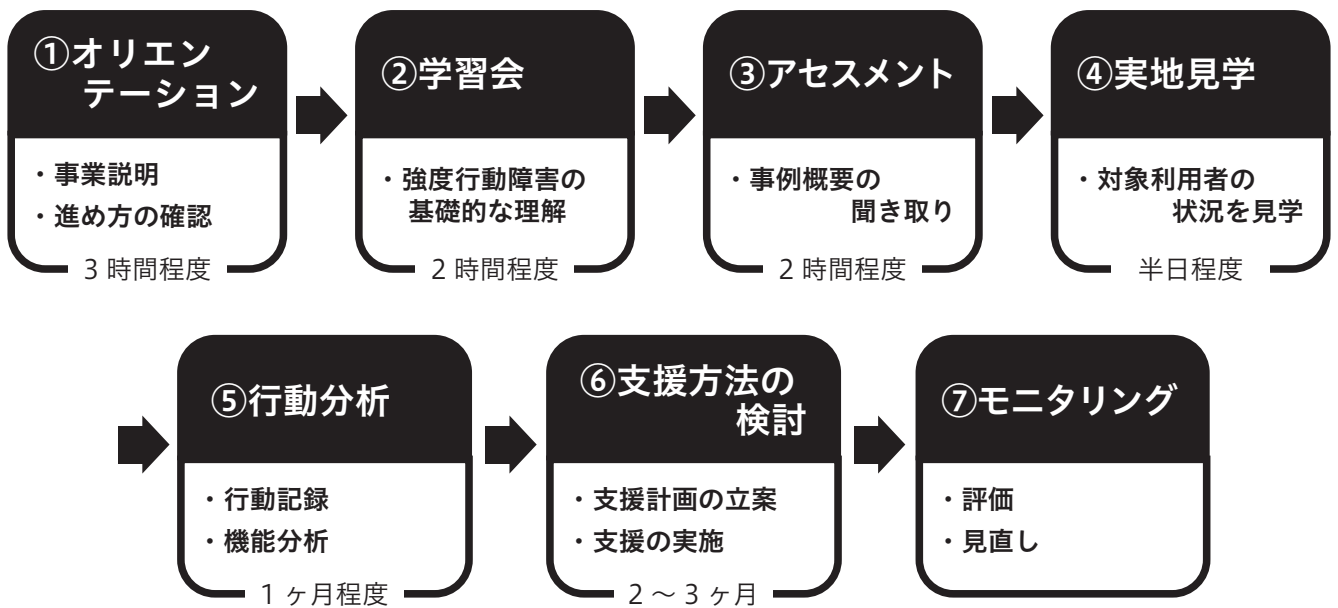


ウエルネットなごや「名古屋市の障害者福祉施策」
| 名古屋市強度行動障害者支援事業
<https://www.kaigo-wel.city.nagoya.jp/view/wel/fukushi/kyokoshien.html>



ウエルネットなごやのホームページより、「名古屋市強度行動障害者専門支援員派遣申請書」をダウンロードし、ご記入ください。申請書を事務局に送っていただきましたら、専門支援員より事業所の担当者にご連絡させていただきます。

< 専門支援員派遣事業における支援プロセス >



専門支援員派遣事業における支援プロセスとしては、上記の7ステップを基本としておりますが、個々の派遣先の事業所の要望に合わせ、柔軟に対応しています。詳細な派遣プロセスについては次ページを参照してください。

①オリエンテーション

事業の簡単な概要の説明や、派遣の進め方についての説明を行います。専門支援員の派遣時間や、訪問回数等について、事業所の希望をお聞きしながらスケジュール調整します。

②学習会

障害の理解や、強度行動障害へのアプローチ方法等の基本的な知識を学習会を通して学んでいただきます。学習会の実施については、日時や時間など事業所の要望に合わせて行います。

③アセスメント

専門支援員が相談事例の聞き取りを行います。利用者情報や、行動問題の状況、障害特性等のアセスメントを行います。

④実地見学

専門支援員が事業所を訪問し、利用者の状況を実地でアセスメントします。

⑤行動分析

利用者の行動問題は、利用者が他者とうまくコミュニケーションをとることができないために生じるケースも少なからずあると考えられています。行動分析とは、利用者の示している行動問題の機能を行動記録やアセスメントを通じて分析します。行動問題の機能は4つに分けられ、その4つの機能は「注目」「要求」「回避・逃避」「感覚」となります。また、分析した機能結果に合わせた支援方法を検討します。

利用者の行動問題の理由について、行動記録やA B C分析等を使って「行動に対する機能的な分析」をします。機能分析とは、ある行動について、そのきっかけとなる「A：行動の前の刺激やできごと (Antecedents)」「B：行動 (Behavior)」「C：行動の結果 (Consequences)」の3つの要素から考え、その行動の機能（目的）を分析する方法です。その頭文字をとってA B C分析ともいいます。

行動問題の多くは、コミュニケーションの機能をもつと言われていています。コミュニケーションの機能には、「注目要求の機能」「物や活動の要求機能」「回避や逃避の機能」「自動強化の機能（感覚機能）」の4つに大きく分けられます。

行動がもつコミュニケーションの機能を分析し、仮定に基づいて支援計画を作成します。

⑥支援方法の検討

事業所の職員と一緒に必要なサポートや支援計画を検討します。支援の手順書等についても必要に応じて作成します。

⑦モニタリング

支援を実施したうえでの評価（モニタリング）を行います。うまくいかなかった場合は、改めて支援方法を検討します。支援がうまくいっている場合は、一定期間モニタリングを行い、支援計画の修正の必要がない場合は、そのまま派遣終了となります。派遣を終了した後も、電話やメール等での相談や、状況の変化等に応じて再度派遣による支援を受けることが可能です。

< 2021 年度実績 >

	生活介護	共同生活援助	施設入所支援	相談支援	計
実派遣事業所数 (件)	32	7	2	1	42
事業所別実派遣ケース (件)	38	7	3	1	49
事業所別実派遣回数 (回)	186	36	40	1	263

対象利用者の年代は18歳から50代と様々です。2021年度訪問した49ケースのうち、7割程が自閉症と診断されています。行動問題の特徴としては、他害行為が半数を占めており、その他、壁や窓ガラス等の破壊行動、自傷行為、異食、排泄、大声を出す等の相談事例がありました。1ケースあたりの派遣訪問期間は、半年～1年程が多く、派遣期間は定めず個々の事業所の状況やケースに合わせて訪問しています。

(3) 強度行動障害者相談支援事業

強度行動障害者にかかる対応や支援方法等にお困りの事業所が相談できる窓口を、事務局に設置しています。

< 2021 年度実績 > 電話相談 6 件

電話相談の傾向としては、在宅で暮らす家族からの相談が多く、家庭内での対応に苦慮している様子が伺えます。他害や自傷行為、物の破壊行為に対する対応方法の相談の他、行動障害のあるお子さんを受け入れてくれる事業所が見つからず困っている、という相談も複数ありました。

(4) 強度行動障害者支援者養成研修事業 (基礎・実践研修)

愛知県から指定を受け、国のカリキュラムに沿った強度行動障害者に対する支援技術の向上のための研修を実施しています。

強度行動障害についての基礎的知識から、アプローチ方法などの技術的なことまで、体系的に学ぶことができます。研修日程 (2日間) については、ウェルネットなごやに掲載しています。

< 2021 年度受講状況 >

- ・基礎研修 (3回) …86名修了
- ・実践研修 (1回) …30名修了

参考文献

監修	特定非営利活動法人全国地域生活支援ネットワーク
編集	牛谷正人・肥後祥治・福島龍三郎
題名	行動障害のある人の「暮らし」を支える 第3版 強度行動障害支援者養成研修【基礎研修・実践研修】テキスト
出版社	中央法規出版

事例 ① ごみを長時間拾い集め、 トイレに物を詰まらせてしまう利用者への支援

名古屋市強度行動障害者専門支援員 今治 信一郎

対象者

対象者は、グループホームを利用している重度知的障害を伴う自閉症の男性、たかし（仮名）さん（40代）です。たかしさんは言葉による意思表示は可能ですが、「やりません」「いきます」などの1語文で答えることが多く、伝えられる情報量も限定的です。「ください」などのやってほしい要求に対して短い言葉で伝えることはできませんが、どちらかという自分で物を掴むなどの行動で意思を表明されることが多いです。

一方、コミュニケーションの理解は、職員からの指示に対しては、日常的によく使う「作業」「ごはん」「トイレ」等の言葉の理解はしていますが、「もうちょっと」などの抽象的な言葉の理解は難しく、他者の言葉かけや指示が入らないことも多くあります。

たかしさんの行動問題としては、「トイレに物を詰まらせる」「ごみを長時間探し続ける」といったこだわり行動が頻繁に発生し、一度始めると長時間同様の行動が続くといった状況がありました。また、無理にその行動を職員が制止をすると、興奮して服を破いてしまうといった行動もありました。

機能的アセスメント

たかしさんに関する情報を収集する目的で、職員など関係者から機能的アセスメントを行いました。職員会議で支援に関する意見交換を行い、行動問題に関する記録も開始しました。その結果、「物をトイレに流す」こだわり行動は、朝の時間帯に多く発生しており、作業所への送りのヘルパーが来るまで続く状況でした。トイレに物を流すのは、①廊下や部屋のごみを探す→②トイレに流すという一連の流れとなっており、ごみをなくしたいために、トイレに流す行動につながっていることも明らかになりました。

また、行動が発生しやすい時間帯を記録してもらったところ、作業所に通所する出勤前に多く発生していることも明らかになりました。

一方、夕方の時間や夜間は、こだわり行動の頻度は少なく、主に起床後から出勤時間にかけて多く発生していることがわかりました。夜はテレビやDVDを見るなど、自分なりの過ごし方があるようですが、朝はテレビやDVDをほとんど見ることがなく、歩き回っていることが多いようです。

また、無理に行動を制止すると、より興奮が高まり、よりこだわりが強くなることも聞き取りを通してわかりました。

仮説

物をトイレに流すなどの行動は、「ひまつぶし」（感覚機能）であると推測されました。夕方の時間帯は、テレビや借りてきたDVDを見るなど、自分なりの余暇時間を過ごしていますが、朝の時間帯は、テレビやDVDはほとんど見ず、特に過ごし方が決まっていません。そのため、起床後から出勤までの間、「何をしたいのか分からない」ことが、たかしさんの困りごとになっているのではないかと推測しました。そこで、元々、床に落ちているごみや、シールの剥がれ等、細部に注目しやすく、こだわりになりやすい特性を持ったたかしさんにとって、出勤までの時間を「ごみを長時間集め、トイレに流す行動をすることで時間を過ごしているのではないかと仮説を立てました。

まずは、たかしさんが「出勤までを見通しを持って自律的に過ごせる方法」を考えてみることにしました。

ストラテジーシート

課題となっている行動

ごみを長時間拾い集め、トイレに物を流す

② A: 事前 (きっかけ)

- 起床後から行動が始まる
- 朝の時間帯に集中
- 出勤まで続く

① B: 課題となっている行動

- ごみを長時間拾い集め、トイレに物を流す

③ C: 事後 (行動の結果)

- スタッフが見守り、どうしても流すと困るものは止める (本人は無くしたいため興奮する)
- 出勤直前まで続く、ヘルパーが迎えにくると切り替わる。

⑤ 事前の対応の工夫

- スケジュールの視覚支援
- 余暇の取り組み (自立課題、DVDの視聴)
- 日課の変更 (就寝時間)

④ 望ましい行動

- 穏やかな気持ちで出勤する

⑥ ほめ方・楽しい活動

- 新たな余暇の開発 (DVD、CD、自立課題)

冰山モデル

課題となっている行動

ごみを長時間拾い集め、トイレに物を流す

(本人の特性)

- 言葉での要求を伝えるのが難しい
- 行動で自分の気持ちを表現する
- 人との関わりが一方的
- 行動を否定されると興奮
- 周囲に合わせての行動が苦手
- 自分なりのルール、行動があり変えられることに強い抵抗

(環境・状況)

- 朝の起床時から頻発する
- 夕方から就寝まではあまり発生していない
- スタッフは見守り程度の関わり
- 夕方はテレビを見て過ごす
- 朝は特定の見る番組はない
- 寝るのが早いので起きるのも早い

必要なサポート



- スケジュールの支援 (次の活動予定を視覚支援で伝える)
- 日課の調整 (生活リズムの見直し)
- 余暇 (自立課題・DVDの視聴)

行動支援計画

たかしさんの朝の過ごし方（余暇時間の過ごし方）を検討することからスタートしました。支援計画としては以下の3点を計画の柱に立てました。

- ① スケジュールの提示（視覚支援）
- ② 日課の見直し（就寝が早いことへの対応）
- ③ 余暇の検討（自立課題の提供）

①の支援については、朝の起床から出発までの流れを写真や絵カードを使ってスケジュールで提示することになりました。次のスケジュールを、見通しを持って過ごすことができるように、たかしさんへの視覚支援スケジュールを作成してみました。

②の支援については、起床時間をもう少し後にずらせるように、就寝時間の見直しを検討しました。たかしさんの就寝時間が20時前と早いことが関係して、結果、起床時間も午前2時～3時と早くなっていることが多いことが記録からわかりました。出勤時間まで6時間もあり、結果的に「長時間何をしてもよいかわからない手持無沙汰の時間」になっていることも、こだわりを強化することにつながっているのではないかと仮定しました。

就寝時間を調整する上で、たかしさんは毎日の過ごし方はある程度習慣化されているところがあり、夕食後ティータイムをとってから就寝という流れが固定化していることに着目をしました。ティータイムの時間自体は、特別決められているわけではなく、何となく夕食後に職員が声掛けをしているとのことであったので、ティータイムの時間を少し後ろにずらして頂き、早くても21時過ぎの就寝となるように日課の調整をしました。

③の出勤前の余暇については、たかしさんの好きな取り組みを提案していこうとなり、たかしさんが好きな作業や物を使っての自立課題に取り組んでみることにしました。

1) 介入期Ⅰ

まずは生活リズムを見直すところから支援を開始しました。就寝時間が19時30分～20時頃と早く、そのため、起床時間も早くなっているのではと考え、たかしさんの好きな食後のティータイムを20時すぎに設定することになりました。その結果、就寝時間は21時過ぎ頃になり、起床時間も5時過ぎと定着していきました。ティータイムの変更については、たかしさん自身、大きな混乱もなく、起床時間についても極端に早く起きてしまうといったことは少なくなりました。

2) 介入期Ⅱ

次に、出勤前までの過ごし方として、好きなDVDやテレビを見るといった過ごし方を提案してみました。しかし、あまり興味を示さず、見ても短時間ですぐに終わってしまい、結果こだわり行動が出てしまうことから、「夜と違って朝はテレビをあまり見ない」過ごし方が定着していると考えられました。

次に、新しいことに取り組むことの方が、たかしさんにとって受け入れやすいのではと考え、たかしさんの得意な仕事の工程とよく似た自立課題を提案してみることにしました。

しかし、自立課題も「やりません」と拒否が続き、取り組むことができませんでした。仕事の工程とよく似た自立課題を提起されることは、たかしさんにとって「なんでここでやるの？」と馴染みにくい提案であったことが推測されました。



たかしさんの部屋で
自立課題に取り組んでみる

3) 介入期Ⅲ

改めて、たかしさんの好きなことを職員でピックアップしてもらいました。作業所職員やホーム職員への聞き取りの中で、たかしさんは好きな芸能人の写真を見ることが好きで、日中の事業所では、時々、切り抜きの写真を職員からもらって楽しみにしていることがわかりました。

また、もらった写真は、紙に貼ってそれを眺めて過ごすことも好きという情報をもとに、「好きな芸能人の写真を切って台紙に貼る」自立課題を提供してみることにしました。写真については、いくつか種類を用意しておき、たかしさんに選択をしてもらい、決めた枚数の台紙に貼って余暇時間を過ごすといった流れを組み立てることにしました。



たかしさんの自立課題セット

支援経過

介入期Ⅲの新たな自立課題を提案し、実施した直後から、たかしさんは「好きな芸能人の写真を切って台紙に貼る」自立課題に興味を示し、自分から「やります！」と手に取る行動が見られました。好きな写真や台紙に貼る枚数も、ある程度自由度がもてるよう、自身で決めていただき、送迎ヘルパーがグループホームにお迎えに来るまで、自室で笑顔で取り組んでいる様子が伺えました。

自立課題に取り組んでからすぐに、「ごみを拾う」こだわり行動の顕著な減少が見られ、現在はまったくこだわり行動が見られなくなりました。

自立課題の取り組みも、写真や台紙の枚数の選択など、なるべく選択の機会を設定したことで、新しい写真を要求されるといった変化もできました。また、手順書を作成し、職員間で支援を統一したことにより、たかしさんも安心して朝の出勤前の時間をのんびりと過ごすことができるようになりました。

まとめ

「ごみを長時間拾い集めトイレに物を詰まらせてしまう」ということに対する支援として、たかしさんが「朝の出勤前の過ごし方をどのように過ごせばいいのか？」に困っている（感覚機能）と仮定し計画を立てました。結果的に、新しい余暇の時間の過ごし方ができたことで、出勤前の、「暇を持て余す時間」が「楽しく自律的に活動できる時間」に変わり、行動問題の軽減につなげることができました。

また、支援がうまくいったことの要因として、「たかしさんの好きなことを軸に活動を組み立てる」ことができたことも大きかったといえます。併せて「活動に選択の機会を設定」「手順書を作成して職員間で支援を統一」したことも支援がうまくいった一因でした。

障害のある方の中では、余暇の過ごし方のバリエーションが少ないために、感覚機能による行動問題が起こるケースは多くあります。今回の支援を通して、たかしさんの生活経験や余暇スキルを広げることにつながりました。また、こだわり行動を「困った行動」ではなく「本人は何に困っているのか？」を起点とし、支援を検討できたことも、支援がうまくいった要因といえます。

今回は強度行動障害者専門支援員によるコンサルテーションを利用し、他者の視点を入れることで、より多角的な視点で支援を組み立てることができました。また、客観的な記録や、根拠に基づいた支援を実施できたことも、支援を推進していく上で大事な要素となり、行動障害の軽減につながりました。

障害のある人にとって、本人の余暇スキルを増やしていくことは、生活の質を高めることにもつながっていきます。また、今回のたかしさんへのアプローチを通じて、当事者への理解を深め、困りごとを知り、そこに寄り添った支援を行うことが大事な点だと改めて感じました。

事例 ② 頻繁に混乱して暴れ、 大声や他害のある利用者への支援

名古屋市強度行動障害者専門支援員 大川 善之

対象者

対象者は、日中は生活介護事業所を利用している中度知的障害を伴う自閉症の男性、まこと（仮名）さん（20代）です。まことさんは「～をします」、「～を下さい」等の2語文程度の話し言葉での他者への伝達は可能で、漢字も書くことができます。職員からまことさんへの伝達は主に言葉で、文字、ジェスチャー等で伝えることもあります。

まことさんの行動問題としては、「注意をされると怒り出し、混乱して暴れて興奮し、物を壊したり他害につながってしまう」「特定の利用者にはちょっかいを出し、反応を見て楽しむ。注意をすると怒ってしまう」「独語が多く、自ら過去の嫌な経験を思い出し、興奮し混乱して暴れる行為につながってしまう」等が挙げられます。また、待つことも非常に苦手で、我慢ができずイライラがつのり、興奮して混乱し暴れる行為につながってしまうこともよく見られました。

機能的アセスメント

まことさんに関する情報収集をするため、事業所のフェイスシート、アセスメントシート、個別支援計画を拝見した後、行動に関する機能的アセスメントや行動に関する聞き取りを行い、行動問題に関する原因や頻度を調査するため、記録を開始しました。記録からは、「独り言が多く、自ら過去の嫌な経験を思い出し、興奮して混乱して暴れる行為につながる」、「予定変更等で本人の思いが通らないので大声を上げて自傷（手を噛む）につながる」、「待つことができずに、イライラして混乱して暴れ、パーテーションを倒し、他害につながった」、「職員の否定的な声掛けや他の利用者の大きな声等に反応して、イライラして混乱して暴れる行為につながった」等の行為がみられ、特に、朝の事業所来所直後の時間、昼食後の自由時間、他の利用者がヘルパーと一緒に帰って行く時間に、混乱して暴れる行為等の行動問題が多く見られました。この3つの時間帯の共通項としては、「職員が他の利用者等に対応したりして、本人に対して十分支援が行き届かない」、「本人にとって何をしたらよいのかわからなくなる」時間帯であることがわかりました。

仮説

混乱して暴れる行為になってしまう行動は、冰山モデルやストラテジーシートの活用により、特に上記の3つの時間帯では、「周りがうるさかったり（職員の否定的な声掛け等も含めて）、何か過去のことが気になってモヤモヤして気持ちが悪かったりするの、もうこの場に居たくない（逃避機能）」、「いつ散歩に行けるのかなどの見通しをもてず我慢ができない、自分のタイミングで動きたい（要求機能）」と推測でき、行動問題は職員に「こうして欲しくない」、「こうして欲しい」等の本人にとっての意思表示であることが理解できます。混乱した状態が改善されないと、まことさんは、自分でもどうしてよいかわからず、興奮し、近くの人や物に八つ当たりをする行動に発展してしまいます。

従ってまずは「否定的な声掛けを止める」、「本人が安心して目の前の作業に集中して活動ができるように、周囲の環境を整える」、「不安を感じた時に、合図をすれば職員が必ず助けに来てくれる」ことを支援の方向性と考え、アプローチを行いました。

ストラテジーシート

課題となっている行動

混乱して暴れ、大声・暴力

② A: 事前 (きっかけ)

- 職員の注意・制止
- 他の利用者の声・音
- 見通しが立たない・不安
- 過去の経験で納得していないことがある
- 暑くてイライラする
- 自分の思い通りにならない時

① B: 課題となっている行動

- 混乱して暴れ、大声・暴力

③ C: 事後 (行動の結果)

- 大きな声を注意をする
- 落ち着くまで様子を見る
- 他の利用者との接触を無くす

↓
行動の意味 = 逃避・要求

⑤ 事前の対応の工夫

- 否定的な声掛けをやめる
- 本人用のスケジュールを作成
- 活動時間の作業提供
- タイマー、チャイムの活用
- 利用者の声等を BGM を流して消す
- 昼食後・帰宅前の騒がしい時間の支援

④ 望ましい行動

- 落ち着いて作業に取り組む
- 大声・暴力を無くす
- スケジュールに沿って行動ができるようになる。

⑥ ほめ方・楽しい活動

- 「〇〇できてすごいね」と褒める
- 担当職員と共有し安心感を持たせる

冰山モデル

課題となっている行動

混乱して暴れ、大声・暴力

(本人の特性)

- 人との関わり方が一方的
- 同じ行動・言葉を繰り返す
- 先の見通しがないと不安
- ルールを変更されると抵抗
- 制止されると対応できない

(環境・状況)

- 大声を出すと注意の声掛け
- 他人の声・音が気になる
- お茶を何度も要求
- 他の利用者と同じ空間で過ごす
- 作業が長続きしない
- 過去の経験で納得できていない部分の独語

必要なサポート



- 否定的な声掛けをやめる
- トラブルの多い時間の対策
- 視覚化したスケジュールを本人に伝える
- 何をしたらよいかわからない時間を無くす

- ① 否定的な声掛けの中止
- ② スケジュール化
- ③ 活動時間での作業提供
- ④ 環境整備（チャイム・タイマー等）

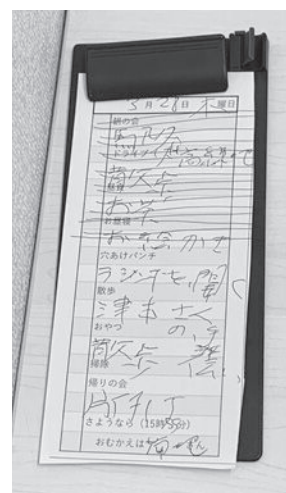
1) 介入期Ⅰ ①否定的な声掛けの中止 ②スケジュール化

① 否定的な声掛けの中止

職員がする声掛けとして、本人の行動問題等を「～しちゃだめ」、「～はしないで」等、否定語で注意をすることがよくあります。職員は、注意することで行動問題をやめてもらいたいという意図が当然あると思いますが、否定語での声掛けをすることにより、まことさんの行為がかえって強化されてしまい、行動問題も増える傾向となってしまいます。それではどんな声掛けがよいかと言えば、「～をして下さい」、「今はこれをお願いします」等、今すべき行動を伝えることで、本人が今すべき行為を認識することとなります。

② スケジュール化

次に1日をどんなスケジュールで活動するのか、毎日まことさんに書いてもらうこととし、手書きのスケジュール表を作成してもらいました。毎日決まっている活動は予め印字しておき、本人が活動内容を自由に選択できる時間には、本人に活動を決めてもらい、手書きで記入してもらいました。本人が自分で予定を決めることで、やる気を促し、集中して行うことを目的としています。職員に決められたスケジュールよりも自分で決めたスケジュールの方が、集中して活動できる時間が増え、徐々に1人でできる時間も増えていきました。



本人が使用した
1日のスケジュール

2) 介入期Ⅱ ③活動時間での作業提供 ④環境整備（チャイム・タイマー等）

③ 活動時間での作業提供

次に、本人ができる作業を増やすことにしました。まことさんは、早く作業を仕上げて終わってしまう傾向があったので、30分以上1人でできる作業を模索しました。初めは1人でできる作業を模索していたのですが、本人が1人で集中してできる作業をあまり見つけることができず、職員が個別の利用者の作業準備をする時間も作れないため、職員が行っている仕事の一部を本人にも手伝ってもらうこととしました。職員の簡単な作業を本人に手伝ってもらうことで、本人への作業提供もしやすくなり、安心できる職員が常に横にいる環境をつくることにもつながるので、本人は安心して作業ができます。内容としては、資料にホチキスをして綴じてもらう、用紙を一緒に取りに行く、みんなのスケジュール表を職員と一緒に作成してもらう等です。



職員と共に作業をしているところ

④ 環境整備（チャイム・タイマー等）

本人が安心できるアイテムとして、チャイムとタイマーを導入しました。チャイムは、本人が鳴らした時には、必ず職員が本人のところに來るルールとし、作業が終わった時、何をしたらよいかわからない時、何か確認したい時、不安な時等に使用できるようにしました。タイマーはデジタルではなく、アナログで残り時間が赤でわかるようなものを使用してもらいました。これにより、帰りの時間帯に本人のヘルパーがあとどれくらいで迎えに來るのかを、本人にも視覚的に理解してもらえようになり、イライラして待つことが無くなりました。



使用したタイマー

支援経過

まことさんの支援には、担当する職員が派遣依頼以前からマンツーマンで付いていたので、基本的に継続してマンツーマンで本人に1日中付いて支援をしてもらいました。これは、本人に安心して作業所で1日過ごしてもらおうことを目的としています。

担当職員には、まず否定語ではなく、促す声掛けにしてもらい、次に1日の作業時間のスケジュールを本人の選択により決めてもらいました。活動が終わったら本人に線を引いて消してもらおうことで、次に何をすればよいかわかりやすくしました。初めのうちは、1つ1つの作業が5～10分で終わってしまうために時間を持って余すことが多く、イライラや行動問題につながりましたが、作業内容を増やしていく行程で、徐々に30分～1時間取り組めることも増えてきて、休憩時間も上手く利用しながら、落ち着いて行動することができるようになりました。そして、チャイムやタイマーを導入することで、本人の行動は、より落ち着き、この頃には担当職員も本人との信頼関係が構築できて、支援がやりやすくなったとのことでした。本人としては、チャイムを鳴らせば必ずすぐに担当職員が来て対応してくれること、担当職員としては、タイマーの使用により本人が待つことができるようになったことにより、お互いの不安が解消できたことは、信頼関係の構築にあたり非常に大きな要因になったと感じました。

まとめ

まことさんの支援の中で、一番注目したのは、安心できる職員の存在の確保でした。本人と一緒に日中を過ごし、本人が困っている時、何をしたらよいか不明な時、周囲の音がうるさくて助けて欲しい時等、これまで本人は、うまく伝えることができず、行動問題につながってしまっていたましたが、リアルタイムで本人の気持ちを理解し、助けてくれる職員の存在により、本人は落ち着いて行動できるようになりました。最後の行程の頃には、担当職員は、本人が何で困っていて、発言や行動の中から何をしたいのか、わかるようになってきたとのことでした。

本人の困りごとや、今何をして次に何をすればよいかを視覚化と言葉で伝え、本人に理解して納得してもらおうことで、本人は安心でき、落ち着いて行動することができます。難しいのは、視覚化と言葉で伝えても、本人が納得していなければ、イライラに通じ行動問題に発展してしまうことです。

本人への支援の課題としては、他の職員でも本人の支援ができるようにすることです。担当職員と同様の支援を行うようにすることで、他の職員でもまことさんと徐々に良い信頼関係が構築できると考えます。

事例 ③ 汚染行為を頻繁に繰り返してしまう利用者への支援

名古屋市強度行動障害者専門支援員 大川 善之

対象者

対象者は、日中は生活介護、夜間・休日は施設入所支援を利用している重度知的障害を伴う自閉症の男性、だいすけ（仮名）さん（40代）です。だいすけさんは「あ～、う～」等の喃語程度の発語はありますが、本人から言葉で伝えることはできません。職員からの言葉や絵カードによる指示は一定程度理解できますが、すべてを理解できているわけではありません。

だいすけさんの行動問題としては、「職員に注意を受けたり、行動を制止されたりすると、嘔吐や汚染行為（放尿や便食、便を服や床に塗りたぐる）をしてしまう」、「思い通りにならないと、嘔吐・汚染行為をしてしまう」、「コーヒーが気になったり、頭の中で次への行動の準備ができないと、次の行動に移れない」等があります。

機能的アセスメント

だいすけさんに関する情報収集をするため、施設のフェイスシート、アセスメントシート、個別支援計画を拝見した後、行動に関する機能的アセスメントや行動に関する聞き取りを行い、行動問題に関する原因や時間帯による頻度を調査するため、記録を開始しました。記録からは、時間帯による違いは見られなかったものの、「職員に汚染行為を注意され反応して混乱して暴れる」、「本人の意思が通らなくて嘔吐、放尿、便を服や床に塗りたぐる」、「本人のタイミングで動けず、イライラする」、「周囲の大きな声や音が気になりイライラする」、「コーヒーのシミや他の利用者の大きな声等が気になり、次の行動に移れない」等が見られ、行動問題につながるきっかけ等をより鮮明化することができました。

また、だいすけさんは、特に衣替えや布団替え時等の変化に弱く、切り替えられるまでに1週間程度ひどい汚染行為が続き、多くの職員が汚染行為の処理で疲弊してしまう状況がありました。

仮説

汚染行為をしてしまう行動は、冰山モデルやストラテジーシートから、「同部屋の利用者の声がうるさくて（職員の否定的な声掛けも含めて）、もうこの場に居たくない（逃避機能）」、「職員の言っていることは理解できるけど、コーヒーのしみや他の利用者の大きな声が気になって、今は動けないが、本当は自分のタイミングで動きたい（要求機能）」と推測でき、行動問題は本人にとって職員に「こうして欲しくない」、「こうして欲しい」等の意思表示であることが理解できます。

したがってまずは、だいすけさんにとって「職員との信頼関係の構築」、「安心できる場所」の方面からアプローチすることとしました。全体的に見て、だいすけさんにとって、この施設で置かれている環境は、本人のペースで行動できない非常に息苦しい環境にあるように感じました。

ストラテジーシート

課題となっている行動

頻繁な汚染行為

② A: 事前 (きっかけ)

- 職員の注意・制止
- 他の利用者の大きな声
- 職員の声掛け・誘導
- 自分の思い通りにならない時

① B: 課題となっている行動

- 汚染行為

③ C: 事後 (行動の結果)

- 職員に注意を受ける
- 落ち着くまで様子を見る
- 入浴等できれいにする

↓
行動の意味 = 逃避・要求

⑤ 事前の対応の工夫

- 否定的な声掛けをやめる
- コーヒー・おやつを要求通り提供
- 安心できる場所の確保
- 本人用のスケジュールを作成

④ 望ましい行動

- 落ち着いて居室で過ごす
- スケジュールに沿って行動ができるようになる。

⑥ ほめ方・楽しいな活動

- 「○○できてすごいね」と褒める
- コーヒー・おやつを要求通り提供する

冰山モデル

課題となっている行動

頻繁な汚染行為

(本人の特性)

- 人との関わり方が一方的
- 同じ行動・言葉を繰り返す
- 先の見通しがないと不安
- ルールを変更されると抵抗
- 制止されると対応できない

(環境・状況)

- 汚染行為により注意、制止
- コーヒー等が気になる
- 同居人がうるさい
- 食事・入浴等以外居室にいる
- 何をするか不明な時間が多い
- 移動時、職員が声掛けする

必要なサポート



- 否定的な声掛けをやめる
- 職員との信頼関係
- 視覚化したスケジュールを本人に伝える
- 安心した場所の提供

- ① 否定的な声掛けの中止
- ② コーヒー、おやつを提供
- ③ 環境整備
- ④ 余暇支援の提供

1) 介入期Ⅰ ① 否定的な声掛けの中止 ② コーヒー、おやつを提供

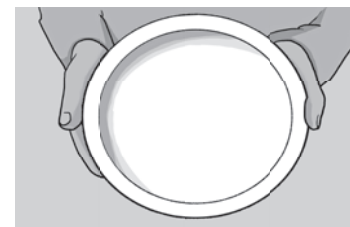
① 否定的な声掛けの中止

職員からの声掛けの多くが、注意の声掛け「～してはダメ」、「～してはいけない」といった言葉であり、職員が近くに来たら「注意される」、「怒られる」、「行為を制止される」といった印象を、だいすけさんは強く感じているようでした。否定的な声掛けにより、本人はかえって次の行動に移れなかったり、問題行動がさらに強化されてしまったりするため、否定的な声掛けをまずは止めてもらいました。そして「～してください」、「～をしましょう」という声掛けに変えてもらうことで、本人が今何をすればいいのか、次に何をすればいいのかを理解できるようになり、少し落ち着いて行動できるようになりました。

② コーヒー、おやつを提供

次に、職員との人間関係があまりよくなく、まだ職員が近づくと「怒られる」、「制止をされる」といった印象が強かったため、だいすけさんが好きなコーヒーとおやつが要求があったら、必ず渡してくださいとお願いしました。職員からは、「1日に何十回も要求があったらどうする?」といった発言もありましたが、「初めは要求の回数が多いかもしれないが、1か月程度すると落ち着いてくるでしょう」と言うてお願いしました。これには、とにかく職員との人間関係を良好なものに変える意図があり、職員は怖い存在ではなく、本人の思いを叶えてくれる、わかってくれる存在であることを、だいすけさんに理解してもらいたかったのです。本人に理解しやすいように、コーヒーの要求の時には、コップを差し出してもらい、おやつ要求の時には、小さなお皿を差し出してもらったという形で行いました。

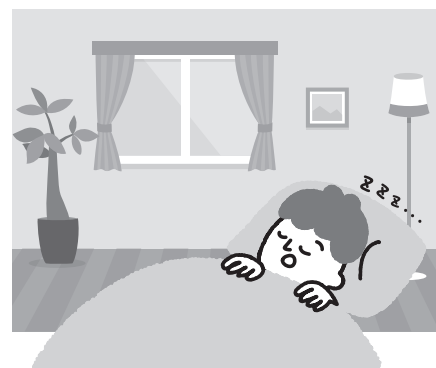
初めはコーヒーの要求が20～25回あった日もありましたが、1か月も経てば10回を下回る回数に変化していきました。本人はコーヒーやおやつをもらった後、満足そうな顔をして飲食し、落ち着いて居室で過ごせる日が増えてきました。



2) 介入期Ⅱ ③ 環境整備 ④ 余暇支援の提供

③ 環境整備

その次に行ったのが、居室の変更です。同部屋の方が大きな声を出されるので、感覚機能が過敏なだいすけさんにとっては安心できる環境にない状態であったため、静かな方との2人部屋に変更してもらいました。この変化には、本人がすぐに対応でき、更に落ち着いて居室内の本人のスペースで過ごせるようにな



りました。この頃には、嘔吐や放尿、便を服や床に塗りたぐる行為は、ほとんど無くなってきていました。安心して落ち着ける環境が、いかに本人にとって大事かということ、実感した時でもあります。以前は非常に険しい表情が多かった本人の顔が、とても柔らかな表情になり、徐々に職員との距離も近づいていることがよくわかり、よい信頼関係が構築できていることがわかりました。

④ 余暇支援の提供

この施設の日課は、自由時間がとても多く、この自由時間は今何をしたらいいかわからない時間で、だいすけさんにとって不安な時間となっていました。この自由時間をだいすけさんにとって充実した時間に変えていく必要があります。初めは、余暇時間としてパズルや日中作業で行っている自立課題等を行ってもらおうと色々としてみましたが、本人から拒否の合図があったり、すぐに止めてしまったりして上手くいきませんでした。偶然ですが、休日の午後、居室内で本人が陽だまりで寝ていることがあり、職員が風邪を引かないように毛布を掛けたとのことでした。それから本人は毛布を要求するようになり、本人のしたかった自由時間の過ごし方は、「寝ること」だったとわかりました。支援としては、「昼間に寝てしまっは、夜に眠れなくなるのでは？」ということも推測できますが、「本人が寝たいのならどうぞ」という感じで職員も受け入れました。その後、特に夜に眠れなくなることも無かったので、職員も寝ることを容認していきました。この頃には、衣替えや布団替えの環境の変化による汚染行為が1週間程度続いていましたが、1～2日程度で切り替えることができるようになりました。

支援経過

だいすけさんの支援でまず注目したのは、職員との信頼関係の構築でした。職員の声掛け1つから改めてもらい、本人にとって安心できる環境を1つ1つ作り上げていきました。否定語の支援を禁止し、促す声掛けにしてもらい、コーヒーやおやつを本人が要求したら必ず提供してもらうことで、「要求をすれば職員が応えてくれる」という「伝わる経験」をしてもらうことが第一段階です。この信頼関係の構築ができることが、非常に大切で時間が掛かります。その後は、本人が困っているだろうと推測できる環境を徐々に改善してもらい、居室の変更や余暇支援の充実等をしていくことで、本人が安心できる環境で、本人のペースで過ごすことができるようになるのです。安心した環境で、信頼できる職員に、本人なりの要求の意思表示をその要求通りに対応することで、利用者は満足することができ、落ち着いて過ごすことができるのです。

まとめ

だいすけさんの支援で重要なことは、本人にとって安心できる環境を作ってあげることでした。コーヒーやおやつに必ず応えていくことで、職員との信頼関係を構築でき、また、居室替えを行うことにより、静かな環境で落ち着いて過ごすことができました。本人が自分のペースで、安心して過ごすことがいかに重要なことで、これまでできていなかったかがわかりました。

この施設の職員は、だいすけさんへの支援は、これまで汚染行為を片付けることが非常に多く辛かったですが、上記の支援に改めることで、「だいすけさんが何をしたいのか、わかるようになり、だいすけさんへの支援が非常にやりやすくなった」と言っています。また、だいすけさんの笑顔が非常に増えて、「この笑顔を色んなところで見たいので、今後は色々工夫をして、本人がもっと楽しめるように支援をしていきたいです」と話してくれました。

事例④ 靴の交換を 何度も要求する利用者への支援

名古屋市強度行動障害者専門支援員 今治 信一郎

対象者

対象者は、グループホームを利用している重度知的障害を伴う自閉症の男性、ひろし（仮名）さん（30代）です。ひろしさんは相手への意思表示は「やりたいです」「おでかけします」などの短い話し言葉で他者に自分の意志を伝えることができます。しかし、唐突で一方的なことも多く、うまく自分の意思が伝わらなかったり、職員が理解できていないと自分で強引にやってしまったり、職員がやってくれるまで何度も求めるような行動があります。

一方、コミュニケーションの理解は、日常的によく使う言葉がけに対してはある程度理解可能ですが、「ちょっと待ってね」などの抽象的な言葉の理解は難しく、時に他者の言葉かけや指示が入っていない様子も見受けられるとのことでした。また、細部に目がいきやすく、ちょっとした汚れや、ほつれに対しても気になることがあります。

ひろしさんの行動問題としては、「靴を何度も購入することを求める」「靴の中敷きの交換を要求する」といったこだわり行動が頻繁に発生し、交換を拒否されたり、要求が叶わないと、「頭をたたく」「手をひっかく」などの自傷行為や、「自分で靴を汚す」「靴底を切ってしまう、濡らしてしまう」などの破壊行為も出てまいります。

また、靴が交換できないことがきっかけで精神的に不安定になり、言動や、目つきが厳しくなるなどの様子もあるようです。一度やり始めると長期間、同様の行動（靴の交換要求）が続くといった状況となってしまいます。また、無理にその行動を職員が制止をすると、興奮してきて更に自傷行為が激しくなるといった行動もエスカレートしてまいります。こだわり行動はグループホーム内だけでなく、作業所でも頻繁に同様の行動が起こるようになります。



靴底を黒く塗る

靴を壊す

機能的アセスメント

ひろしさんに関する情報を収集する目的で、職員など関係者から機能的アセスメントを行った後、支援に関する意見交換を行いました。同時に行動が発生した前後の状況や、どのような時間帯に行動が多く発生しやすいか、行動問題に関する記録も開始してもらいました。

その結果、「靴を交換する」こだわり行動に対して、職員によっての対応の差があることが明らかになりました。職員によっては「まだ交換できません」ときっぱりと断る場合と、本人の要求を断れず、過去に「靴を購入する」といった対応もあったようです。支援の仕方も個々の職員によって様々ということが、結果的に、ひろしさんの困りごとになっているのではないかとすることも推測することができました。

また、現状、靴（もしくは中敷き）の交換時期は特に定めておらず、ぼろぼろになって使用ができなくなったら交換していることも、聞き取りを通して明らかになりました。

また、行動記録から「靴の交換」要求の行動が特にしやすいのは、作業所からホームへの帰宅時とホームから作業所への出発前であることも記録からわかりました。併せて、靴が新品に交換されてしばらくは、要求行動が落ち着いていますが、一度、交換の要求が出ると、短いスパンで何度も要求することも記録から明らかになりました。

仮説

靴の交換の行動問題は、「靴を交換」すれば、一定期間、その行動が終息しているところから要求行動（靴を交換したい）であると推測されました。

一方、交換したいという要求に対し、職員によって対応の差があることが、結果的にひろしさんにとって混乱の要因となり、要求行動が強くなるのではないかと仮説を立てました。ひろしさんにとって、「靴を交換したい」というのが、一番の行動の理由ですが、ひろしさんは何に困っているのかに着目し考えてみたところ、靴が交換されないことよりも「どうすれば靴を交換できるのか」「いつになったら交換できるのか」がわからないために、行動問題が継続して起きているのではと仮説を立てました。

裏を返すと、現状、職員はひろしさんに、「いつ、どうすれば靴が交換できるのか」という説明ができていないことがわかりました。ひろしさんは、「靴が履けなくなれば交換」ということを過去の経験から理解しているため、「靴を頻繁に汚す」「濡らして靴を履けなくする」行動を通して、靴の交換を要求しており、行動問題が発生する原因となっているのではと考えました。「いつ交換するのか」「どうなれば交換となるのか」の手続きをポイントに、ひろしさんが理解できるような支援方法を考えてみようとなりました。

ストラテジーシート

課題となっている行動

靴の交換を何度も要求する

② A: 事前 (きっかけ)

- 靴が汚れたとき
- 靴のほつれをみつけた時
- 朝、夕の出勤、帰社直後
- 交換を断られたとき

① B: 課題となっている行動

- 靴の交換を何度も要求する

③ C: 事後 (行動の結果)

- 要求が通るまで何度も要求
- 職員を選んで要求 (強く断る方にはいかない)
- 手袋、ズボンなどにも拡大
- 要求が通った後はしばらく落ち着く

⑤ 事前の対応の工夫

- スケジュール (交換日) の視覚支援の導入 *段階的に購入日を伸ばしていく
- 肯定的な声掛け (いつ購入できるのかを伝える)
- 支援の統一 (作業所にも同様の支援をお願いします。)

④ 望ましい行動

- 落ち着いて交換

⑥ ほめ方・楽しいな活動

- 予定した日に靴 (中敷き) の購入

冰山モデル

課題となっている行動

靴の交換を何度も要求する

(本人の特性)

- 抽象的な表現は理解が難しい
- 自分なりの解釈が多く、周囲とのずれが多い
- 短く具体的な言葉でないと理解しづらい
- 行動で気持ちを表す
- 細かな事に目が行きやすい
- 周囲に合わせての行動が苦手
- 思いついたら途中で止められない

(環境・状況)

- 朝・夕の時間に発生しやすい
- スタッフに交換を求める *パートさんに多い
- 自宅ではあまり見られない
- 作業所では同様の行動が見られる
- 交換した後は落ち着く

必要なサポート



- 購入のスケジュール化 (視覚支援)
- 支援の統一
- 肯定的な声掛け (いつ購入できるのかを伝える)

ひろしさんの支援計画には以下の3点を位置づけました。

- ① 購入のスケジュール化（視覚支援）
- ② 支援の統一
- ③ 肯定的な声掛け（ダメを伝えるのではなく、いつ購入できるかを伝える）

ひろしさんの支援を計画していく中で、「いつ購入できるのか」を説明する方法として、カレンダーによるスケジュールを視覚的に提示する計画を立てました。カレンダーによるスケジュール支援を採用したのは、職員の聞き取りがヒントとなりました。職員への聞き取りの中で、ひろしさんは土日に余暇支援を利用しており、いつも部屋に貼ってあるカレンダーを見ながら、「〇〇日はお出かけ！」と楽しみに外出予定を確認しているとの職員の話がありました。また、事業所側の都合によるキャンセルの変更も、あらかじめスケジュールに×印をつけ説明することで、予定が理解できれば、大きな混乱もなく納得する力もあることがわかりました。カレンダーによるスケジュール確認が、すでにひろしさんにとって「見通しを立てる上で理解しやすいツール」として機能していることから、その強みを活用した方が、支援の成功率も上がります。今回は、「スケジュール表を使って靴の交換時期を伝える」ことを支援計画にし、最初はスモールステップで交換スパンを短めに設定し、まずはスケジュール表の意味や目的を理解してもらうことを目標に掲げました。靴の中敷きは1週間、靴は2か月で交換設定し、ひろしさんの理解度を見ながら、徐々に交換期間を長くする形としました。また、ひろしさんから交換を要求されたときは、スケジュール表を指さして交換時期を伝えてもらえるように支援を統一してもらいました。その際も、「ダメだよ」、「まだ交換時期じゃないよ」の否定的な表現ではなく、「この日に交換できるね」と肯定的な声掛けをするようにしてもらいました。

ひろしさんが使っているスケジュール表

1) 介入期

ひろしさんの部屋に貼ってあるスケジュール表に、靴の中敷きマークと、靴の交換日を記し、ひろしさんに対して職員から説明を行いました。当初は、ひろしさんは、うなずきながらも、まだよくわかっていない様子で、すぐに「中敷きの交換の要求」や、「靴を汚す行動」が見られ、要求が叶わないと、自傷行為も見られました。職員にはその都度、根気強くスケジュール表の指さしと声掛けで、交換できる日を伝えてもらうようにしました。

支援をスタートして間もない時期に、一度ひろしさんの自傷行為が激しくなり「自傷行為が激しいですがどうしましょうか？」と職員から専門支援員に相談の電話が入りましたが、ひろしさんの自傷の状況（怪我の危険性がないかどうか）を確認し、もうしばらく続けてもらうようお願いしました。幸い、自傷の強度はそれ以上激しくはならず、中敷きの交換の確認は何度もありましたが、その都度「この日に交換できるよ」と、スケジュールを指差し、肯定的な声掛けと併せ継続して支援を行っていただきました。以降も交換の要求は何度もありましたが、その都度のスケジュール表を使った確認で、それ以上行動が激しくなることは少なくなったようでした。

2) 介入期 II

最初の予定された中敷きの購入日、購入しに行くことをひろしさんに伝えると、すごく喜んだそうです。その日以来、スケジュール表の意味が理解できたのか、自ら購入する日を教えてくれる行動が見られるようになったようです。また、靴の交換日では、朝からニコニコの笑顔で「ありがとうございます」と職員に声をかけるなど、これまで見たことがない笑顔と言葉があったと職員から報告がありました。



靴を購入するひろしさん

3) 介入期 III

以降は、徐々に購入期間を延ばしていきましたが、スケジュール表の使い方や目的を理解できたひろしさんは大きな混乱もなく、購入日を確認して落ち着いて行動できるようになっています。

支援経過

ひろしさんの介入期 III以降は、スケジュールで確認をすることで、これまでの要求行動はほとんど見られなくなったようです。また、グループホーム内でも支援を統一して行ってもらったことで、関われる人も増えたとの評価もありました。ひろしさんが通所する作業所でも同様のスケジュールによる確認の支援を統一して行ってもらったことにより、作業所内でも要求行動は見られなくなったとのことでした。

まとめ

今回、ひろしさんへの支援がうまくいった要因としては、本人が既に持っているスキル（スケジュール表の活用）を支援で取り入れたことが、比較的早い段階で行動問題が解決した理由だといえます。本人の強みを支援に活用できたケースとなりました。

併せて、グループホームだけでなく、ひろしさんが通所する作業所でも同様の統一した支援を行えたことも、支援がより定着しやすい要因となりました。今回は強度行動障害者専門支援員によるコンサルテーションを利用し、普段の支援を改めて見直してみることで、より多角的な視点で支援を検討することができました。「靴の交換を何度も要求する」という表面的な行動に着目するのではなく、「何にひろしさんは困っているのか？」とひろしさんの本当の困りごとを考え、記録をとり、仮説を立て、職員の皆さんが積極的に取り組んでいただけたことも大きかったように思います。

ひろしさんの支援の振り返り会議の中で、「支援がうまくいったことで、よりひろしさんを深く理解することにつながり、また、自分たちの支援に自信がもてた」との職員の言葉が強く印象に残りました。

事例 ⑤ 机や壁に激しく頭をぶつける自傷行為、扉を強い力で閉めてしまう利用者への支援

名古屋市強度行動障害者専門支援員 杉本 都

対象者

父母とともに自宅で生活し、日中は生活介護を利用している重度知的障害を伴う自閉症の男性、はじめ（仮名）さん（30代）です。人と関わるのが好きで「〇〇ってかっこいいね」「〇〇してよかったね」など、自分から職員に積極的に話しかけます。職員からの簡単な質問には単語での返答ができる方です。しかし、はじめさんはいつも唐突に、自分が話したいときに話しかけます。内容はたいてい決まっていて、同じやり取りをします。はじめさんの発信に対して、職員がはじめさんの期待する返答をしなければ不穏になります。そんなはじめさんと他利用者との関係は良好とは言い難く、職員が介入しなければトラブルになることが多い方です。また、はじめさんは事業所内の扉の開閉に非常にこだわり、誰かが扉を開けるとすぐさま走って行って、ドア枠が歪むほど強い力で閉めてしまいます。制止されると不穏になり、自傷に繋がることもあります。自傷はそれほど不穏ではないときにも起き、机や壁に自分の頭を激しくぶつける行為が頻繁にみられます。そのため、保護帽の使用が検討されていました。

機能的アセスメント

はじめさんの情報収集として、まずは職員から聞き取りを行い、行動問題に関する記録を開始しました。「頭をぶつける自傷行為」「他利用者とのトラブル」「扉を強い力で閉める」という行動問題が一日を通して頻回に起きていました。

自傷するときは、職員に「頭ぶつけていい？」という問いかけから始まるのがほとんどでした。作業中には自傷行為は起きていませんでした。作業室を抜け出して、事務所にいる職員に「頭ぶつけていい？」と問いかけることもありました。その際は、事務所の職員が作業室の職員を呼んで対応していました。

はじめさんが他利用者に関わる時には、職員の仲介を常に必要とします。利用者とトラブルになる場面で一番多かったのは、朝の会で一日のスケジュールをマグネットで貼る時でした。予定が組まれた後に、はじめさんは予定として貼られたマグネットを自分の思うように貼り直し、他利用者から注意を受けてトラブルになっていました。また、食事中は落ち着いているのに、食事が終わると周りの利用者とのトラブルが起きていました。

扉を強く閉める行為は、職員に注意を受けたり、他利用者とのトラブルがあった後などに多く発生していることもわかりました。

仮説

「頭をぶつける自傷行為」は、「職員に関わってほしいためにしている」（注目機能）と仮定しました。職員の注目を引くために作業室を出るものの、職員に反応してもらえない時に、頭をぶつけるという行動によって職員の注目を得ていると考えました。また、「他利用者とのトラブル」は、環境を改善することで防ぐことができると考えました。「扉を強い力で閉める行動」は、職員から注意を受けたり、他利用者とのトラブルなどで、はじめさんにストレスがかかったときに起きる行動ではないかと捉えて支援をすることにしました。

ストラテジーシート

課題となっている行動

壁や机に頭をぶつける

② A: 事前 (きっかけ)

- 作業室で仕事が無くなり作業室をでる

① B: 課題となっている行動

- 壁や机に頭をぶつける

③ C: 事後 (行動の結果)

- 誰かが来て対応する
- 促されて作業室に戻る

⑤ 事前の対応の工夫

- 本人ができる自立課題を準備する
- できたらそれを伝えられるようにする

④ 望ましい行動

- 作業室で作業を続ける

⑥ ほめ方・楽しいな活動

- 作業ができて褒められる
- 職員と楽しく話ができる

冰山モデル

課題となっている行動

壁や机に頭をぶつける

(本人の特性)

- 表情や身振りを誤って理解する
- 人や場面によって態度を変えられない
- 他の人と関心が異なる
- 集団が苦手
- 特定のものに強く固執する
- 特定の行動を繰り返す
- 落ち着きがなくとどまっていられない
- 記憶が他の人と異なる

(環境・状況)

- すぐにやめる時とどんどんひどくなる時がある
- 集中して何かをしている時は起きない
- 自分が話しかけたことに期待する反応がない
- 作業室を抜けてきて、食事スペースで行う
- 「ぶつけていい?」と聞いてからぶつける
- 食事スペースに誰もいないと事務所の職員に聞いてからぶつけようとする
- 扉を閉めることを止められたとき

必要なサポート



- 話しかけたい、関わりたいという気持ちを満たせるようにする
- 集中して取り組める作業を提供する

行動支援計画

職員に注目されているという安心感を持って、他利用者とのトラブルを減らして、ストレスの少ない環境で過ごせるようにすることを目的に行動支援計画を立てました。

- ①他利用者とトラブルにならない環境を作る。
- ②はじめさんが落ち着いて作業に取り組み、作業室内で過ごせるような支援を行う。
- ③作業と休憩のメリハリをつけ、注目を引く行動をとらなくても注目されている環境を作る。
- ④扉を閉める行為は止めるのではなく、静かに閉められるようになる支援を行う。

1) 介入期Ⅰ (他利用者とのトラブルになりにくい環境づくり)

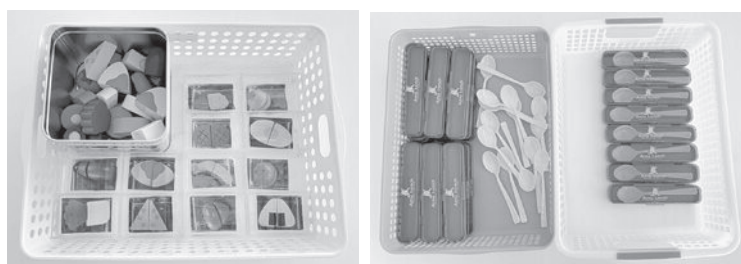
朝の会で決められた、利用者や職員の行動予定表のマグネットを、ひろしさんが勝手に貼り替えてしまうことでトラブルになっていたため、予定表はマグネットを使わずに、職員にホワイトボードに直接書き込みをしてもらうようにしました。

食事中は、隣の席に他利用者がいても落ち着いて過ごすことができるのに、食事を終えると空いている椅子の位置にこだわって動かす、同じ話を繰り返すなどで他利用者とトラブルになっていたため、職員がさりげなく介入ができる座席へ変更を行いました。

2) 介入期Ⅱ (作業室内で過ごせる支援・作業と休憩時間のメリハリ)

作業時間は、手持ち無沙汰になってしまっていた既存の作業ではなく、はじめさんに合った自立課題に取り組んでもらうことにしました。こうして、作業時間は作業室内で落ち着いて過ごし、休憩時間は職員と楽しくやり取りするというメリハリをつけることで、「関わってほしい」というはじめさんの思いが満たされる対応を行うようにしました。

自立課題は、はじめさんが得意なことやできそうなことを職員に提案・作成してもらい、はじめさんに取り組んでもらいました。



3) 介入期Ⅲ (扉を静かに閉められるようになる支援・はじめさんが安心感をもてるように)

開いた扉を強い力で閉めるはじめさんの行動に関しては、これまでは職員が本人より先に代わって閉めたり、「静かに閉めてください」と本人のそばに駆け寄って声をかけるなどの対応がされていました。本人が扉を強く閉めないようにしようと職員間にピリピリした雰囲気がありました。本人の扉を閉めるという行動を無理に変えたり、止めさせようとするのではなく、静かに閉めるという行動を促すようにすることを提案しました。そこで、室内の空気の入替えの目的で、はじめさんに窓を開閉する担当となってもらい、決まった時間に「窓を開ける」「窓を閉める」ということをしてもらいました。開けた窓はタイマーを仕掛けて、タイマーが鳴ったら静かに閉めることを伝えながら職員がやってみせることで、はじめさんは窓を静かに開閉することができました。



「頭をぶつける自傷行為」については、職員が大きな声を出したり、慌てて止めるなど過剰に反応しないように対応を統一することとしました。はじめさんから「頭ぶつけていい？」という問いかけがあったときは、「頭をぶつけていいと思いますか？」と問い返す、「頭をぶつけるとどうなりますか？」と尋ねるなどのやり取りを丁寧に行うようにしました。それ以外にもはじめさんからの発信には、はじめさんが不安にならない返答をするようにしました。

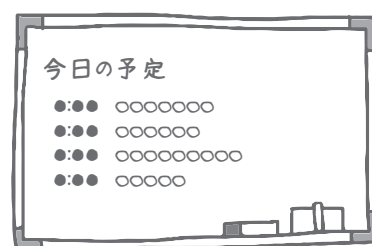
支援経過

朝の会での予定の発信を、マグネットからホワイトボードへの書き込みに変更したことで、はじめさんがマグネットを気にする必要がなくなりました。また、食事の席を変更したことで、他利用者とのトラブルは大幅に減りました。

作業時間は、職員とはじめさんは自立課題に関するやりとりのみ行い、基本は静かに自立課題を行い、休憩時間とのメリハリをつけました。休憩時間は、はじめさんと職員が存分に話せる時間であることをはじめさんが理解できてくると、次第に作業中にはじめさんが職員に話しかける回数は減り、休憩時間の職員とのやり取りを楽しむようになりました。

「扉を強く閉める行動」は、はじめさんに窓の開閉係を担当してもらったことで、窓を静かに閉めることができました。すると、窓と同様に扉も静かに閉めることができるようになっていきました。

「頭をぶつける自傷行為」は、作業中に作業室を出ていくことがなくなったこと、休憩時間の職員とのやり取りが増えたことで回数が減りました。また、はじめさんからの「頭ぶつけていい？」の問いかけに丁寧に答えることで、行動に移さないことが増えていきました。それでもやってしまったときは、職員は過度に関わらずにおくことで行動は減り、検討されていた保護帽の使用は必要がなくなっていました。



まとめ

はじめさんが作業時間にさまざまな自立課題に取り組むようになったことで、はじめさんの持てる力が発揮され、作業室を出ていくという行動で注目を引かなくてもよくなりました。はじめさんは作業室を出ても職員の注目を引くことができなかつたとき、机や壁に頭をぶつければ、必ず誰かが対応してくれると学習していたのでしょう。頭をぶつけるという行動は危険であり、すぐにやめてほしいと誰もが思います。扉を強い力で閉める行動も同様です。職員の皆さんが「なぜこの行動が起きるのか」を考え、行動の目的が「注目」であることを理解できたとき、良かれと思ってしていた対応が、はじめさんの行動を強化していたのではないかと気づくことができました。はじめさんの特性に合わせて、はじめさんが安心して過ごせる支援ができるようになったことで、行動は変わっていきました。はじめさんは現在、できることがさらに増え、毎日元気に通所されているそうです。

大声で叫ぶ、事業所に入れない利用者への支援

名古屋市強度行動障害者専門支援員 大川 善之

対象者

対象者は、日中は生活介護事業所を利用している重度知的障害を伴う自閉症の女性、ようこ（仮名）さん（20代）です。ようこさんは、エコラリア（オウム返し）での発語は時々ありますが、基本的に本人から言葉で伝えることはありません。職員が本人に伝えるには、これまで言葉を中心として本人に伝えてきました。また、偏食が多く、鶏肉類や麺類は好きでよく食べますが、それ以外の食事はほとんど食べないとのこと。人は嫌いではなく賑やかなところも好きですが、ようこさんにとって怖い人（大声を上げる、他害がある）がいると一緒に活動ができなくなる等の極端な傾向が見られます。

ようこさんの行動問題としては、「不快なことや、気持ちが相手に伝わらないこと、暑さで我慢できなくてイライラすることがあると、大声で叫ぶことがある」、「他害のある利用者がいて怖くて事業所に入れない」等の行為があります。事業所内に入れず、送迎車が事業所に着いても、怖くて事業所の中に入ることができず、そのまま送迎車の中で一日中過ごす日々が続いていました。

機能的アセスメント

ようこさんに関する情報収集をするため、事業所のフェイスシート、アセスメントシート、個別支援計画を拝見した後、行動に関する機能的アセスメントや行動に関する聞き取りを行い、行動問題に関する原因や頻度を調査するため、記録を開始しました。記録からは、「車内で暑くてイライラして叫ぶ」、「ドライブ途中、本人の思ったルートとは違い、踏切で止まったことで叫ぶ」、「車内で寝ていた後、職員の声掛けで叫ぶ」、「職員の声掛けをしても、車から降りられない」等の行動が見られ、本人の思いが職員に上手く伝わらなかったり、安心できる環境にならなかったりすると、大声が出るのがわかりました。また、一度事業所に入ることができれば、作業室内である程度作業をしたり、作業室内で仮眠を取ったりすることもわかりました。

仮説

大声を出す行為に関しては、冰山モデルやストラテジーシートの活用により、本人の思いを理解して欲しい（要求機能）であること、事業所に入れない理由は、怖いので入りたくない（逃避機能）であることが推測でき、表出する行動問題は、「～して欲しい」、「怖いので入れない」という思いを伝える、本人にとっての唯一の表現方法であることも理解できます。

したがってまずは、絵カードを使用して、事業所の中での取り組みを具体的にイメージできるようにし、「怖くないところに行くので車から降りる」ことをわかりやすく伝えることとしました。また、「本人の好きな手羽先を購入して事業所内で食べる」ことを伝え、ようこさんにとって、「とても楽しいことをこれから行うので一緒に行こうね」と誘うことから、アプローチすることとしました。不安を少しでも取り除き、楽しいことを行うことで、「事業所内に何とかして入れないか？」という思いで、支援の方向性を考えました。

ストラテジーシート

課題となっている行動

大声で叫ぶ・作業所に入れない

② A: 事前 (きっかけ)

- 暑さ・寒さ
- 体調が悪い
- 車に他の人が乗車
- 周囲の声・音、待つ時間が長い

① B: 課題となっている行動

- 大声で叫ぶ
- 作業所に入れない

③ C: 事後 (行動の結果)

- 作業所に入りたくない⇒逃避
- 安心した場所で好きなことをしたい⇒要求

↓
行動の意味 = 逃避・要求

⑤ 事前の対応の工夫

- 手羽先等を購入し作業所で食べる
- 絵カードの作成
- 作業活動の実施
- 活動は本人に選択してもらう
- 集中できる環境設定
- 本人用のスケジュールを作成

④ 望ましい行動

- 作業所に入ることができる
- 落ち着いて活動に取り組む

⑥ ほめ方・楽しいな活動

- 「○○できてすごいね」と褒める
- 手羽先等を食べることができる

冰山モデル

課題となっている行動

大声で叫ぶ・作業所に入れない

(本人の特性)

- 湿度・温度に敏感
- 見えないものの理解が難しい
- 2語文以上の言葉の理解
- やり取りが多いと不安
- こだわり同一性の保持が強い
- 興味関心が狭くて強い
- 細部が気になり違いに敏感
- 味覚の過敏鈍麻がある
- うるさい、怒る声が苦手

(環境・状況)

- エアコン室温調整が難しい
- 言葉とジェスチャーで指示
- 時間帯で職員が決めている
- 物と活動が部分的に理解できるようにしている
- 次の活動を言葉で伝達
- 食事は食べやすいものを提供
- 部屋までの動線がうるさい

必要なサポート



- 活動が理解しやすい環境の設定
- 視覚化したスケジュールを提示
- 苦手な場面を避けての動線の設定

- ① 写真カードの使用
- ② 好きなものを購入し事業所で食べる
- ③ 作業室内の環境整備
- ④ 安心できる職員とイベント参加

1) 介入期Ⅰ ① 写真カードの使用 ② 好きなものを購入し事業所で食べる

① 写真カードの使用

事業所に入れず送迎車の中で一日を過ごしていたようこさんに、まずは一日の活動について具体的なイメージをもってもらうとともに、自ら活動を選択することで意欲をもてるよう、絵カードの提示を試みました。しかし、絵カードでは理解が少し難しかったので、今度は実物を写真で撮り「写真カード」を作成しました。写真カードで午前及び午後何をするのかを本人に毎日示したところ、ようこさんも理解しやすくなり、ようこさんから活動について意思表示をしてくれるようになりました。言葉だけでは伝わらないニュアンスが写真カードで伝わり、本人がやりたくない活動については、大声で拒否するのではなく「カードを払いのける」、「投げる」等の方法で伝えられるようになりました。また、取り組みたい活動を自分で選択し、写真カードを自分の側に置いて活動することができました。事業所に入れるようになるまでの期間は、送迎車の中でこの取り組みを繰り返し行いました。



実際に使用した写真カード

② 好きなものを購入し事業所で食べる

次に、朝、送迎車で事業所に来てから、何とか事業所内に入ってもらうと試みました。ようこさんは怖い利用者がいるので車から降りようとはしなかったのですが、本人の大好きな「手羽先」を近くのコンビニで購入し、事業所内で食べる取り組みを行いました。手羽先は冷凍品を購入し、電子レンジでチンしなければ、本人は食べることができないことを伝えました。本人も冷凍のままでは手羽先を食べられないことはわかっており、事業所の中に入ることには葛藤があったと思いますが、怖い思いよりも食べたい思いが勝り、事業所内に入ることができました。

2) 介入期Ⅱ ③ 作業室内の環境整備 ④ 安心できる職員とイベント参加

③ 作業室内の環境整備

次に作業室内をようこさんが集中して作業等ができるように環境調整を行いました。怖い利用者の声を少しでも聞こえにくくして、活動に集中できるようにするために、活動で使用する机と椅子の配置を壁側に移動しました。また、本人が作業に集中できる時間に合った休憩時間にするため、以前よりも休憩時間を短めにして声掛けするように変えました。この意図としては、「本人が自分で決めた作業はしっかり行いたい」という思いが芽生えるようになることと、活動と休憩にメリハリをもたせることでした。ようこさんが活動できたときには、必ず本人にわかりやすい形で褒めることを職員にお願いし、活動に対するモチベーションを上げてもらいました。



実際に使用した周囲が気になりにくい机

④ 安心できる職員とイベント参加

安心できる職員は、通所すると毎日好きなものをコンビニで購入してくれるし、活動も頑張ってくれれば褒めてくれるという存在であることが、ようこさんの中で明確となりました。次に、その職員と一緒に事業所内のイベントに参加することを試みました。参加者には怖い利用者もいて不安だけど、安心できる職員と一緒に、ようこさんは歌や踊りが好きなので「聞きたい」という思いが強くなり、イベントにも参加できるようになりました。初めは恐る恐るの参加でしたが、イベントを重ねる毎に、本人にとって、何も怖くないことがわかると、徐々に笑顔も増え、ようこさんなりに楽しんでイベントに参加できるようになりました。歌や踊り等、本人が集中して楽しむことで、不安がっていた様子はどこかに消え、イベントを満喫されていました。

支援経過

ようこさんの支援でまず注目したのは、写真カードの利用や手羽先の購入ツアーなどのようこさんの好きな活動を通して、職員と安心して活動できるようでした。本人が行きたくないところに職員の都合で無理やり行かせようとしても、本人は動いてくれません。本人は魅力があることや、信頼できる職員からの声掛け等でなければ、動いてはくれないでしょう。本人の好きな食べ物を購入し、事業所内に食べ物を持ち込むことで、他の利用者が食べ物を気にしてトラブルになる可能性も十分にあります。今回は、職員同士が協力して、他の利用者とトラブルが無いように、また、ようこさんに怖い利用者が近づかないように支援をすることで、ようこさんは事業所内に入ることができました。ようこさんにとって、写真カードが一番興味があることを示して、事業所内に入れる行動につながると考えたのが、手羽先の購入ツアーでした。ようこさんの不安や怖い思いを職員が理解しつつ、本人が一番好きな食べ物を購入する支援を毎日行うことで、職員との信頼関係が構築できたと考えます。職員との信頼関係が構築できれば、その後の支援は非常に楽になります。次の支援は、集中して作業ができる環境調整をすること、その次の支援は、本人が決めたスケジュールで活動ができるように支援することです。自分で決めたスケジュールであれば、比較的積極的に行動してくれます。本人の自尊心を考慮し、活動を容認することで、安心した環境で集中した活動ができるようになるのです。

まとめ

ようこさんへの支援で最も注目したのは、怖さや不安で入ることや参加ができないことよりも、本人が、「してみたい」、「やりたい」という思いを大事に支援することでした。このことにより、本人は成功体験を経験することとなり、その後も大きな問題なく行動できるようになりました。ようこさんが事業所内に入り作業室で活動ができてからは、写真カードの作業項目のカードを増やしてもらい、どの作業を次にやりたいか本人に決めてもらい、活動につなげました。作業室の机等のレイアウトも変更し、本人が作業等に集中して取り組むことができること、パーテーション等で囲むことで、他の利用者が同じ作業室にいても、安心して休憩できるようになりました。

利用者が信頼関係の構築できた職員とどんなことをしたいのか考え、実行することで、利用者の笑顔はより増えていくと考えます。

食事や食器を投げてしまう利用者への支援

名古屋市強度行動障害者専門支援員 西山 裕一

対象者

日中は3つの生活介護事業所を利用し、両親とともに自宅で生活をされているエリ（仮名）さん（20代）です。エリさんのコミュニケーション方法はエコラリア（オウム返し）が多く、言語は2語文程度を使用することが可能です。「(トイレに)行かないの～」など嫌なことを示すことはできますが、要求など言葉で上手く伝えることは苦手であり、物を投げたり、他者を叩いたりする行動で、訴えることが多くあります。指示は理解できている様子ですが、「お茶はまだだよ」というような否定的な声掛けに対しては怒れてしまいます。また、自分の思っているタイミングと活動がズレてしまうと、混乱してしまうこともありました。

一方で、ダンスや散歩など体を動かすことが大好きで、人と関わりながら楽しんでいるときはとっても素敵な笑顔を見せてくれます。

そんなエリさんは、「食事中に食事や食器を投げてしまう」という行動問題があり、支援を考えていくことになりました。

機能的アセスメント

職員からのヒアリングで、食事の場面での様子や記録からアセスメントを行いました。職員の対応としては、食事を投げてしまう行動が危険なこともあり、少し離れて様子を見守るようにしていたということでした。また、エリさんは食事の途中でおかずなどを箸で混ぜたりして、遊びだしたり食べるペースが急に落ちるといったことがあるとのことでした。

食事の量については、職員から聞き取り、食事を実際に見せていただいた結果、食べる量としては比較的多いということもわかってきました。

ご本人の障害特性をチェックしていく中で、言葉によるコミュニケーションが苦手なこと、特に相手に伝えることが苦手なのではないか、ということも特性として見えてきました。

仮説

関係者からのヒアリングや記録、特性のチェックから食事や食器を投げてしまう行動について仮説を立ててきました。食事開始からしばらくは、毎回ペース良く食べていますが、途中から遊びだし、ペースが落ちてしまい、その後食事や食器を投げてしまう行動があることがわかりました。次に、エリさんの特性として言葉を使っでのコミュニケーションが苦手ということ、タイミングがズれると不安になってしまうという特性が冰山モデルを作成する中で見えてきました。おそらく、お腹がいっぱいになり食事を残したいけれども、近くに職員がいないため、どのようにして食事を残したいことを伝えてよいのか、その方法がわからず、投げてしまえば食べなくて済むという逃避行動ではないかと仮定しました。

ストラテジーシート

課題となっている行動

食事・食器を投げてしまう

② A: 事前 (きっかけ)

- 職員は距離を置いて見守りをしている
- 食事のペースが落ちる
- おかずを箸でいじりながら遊ぶ

① B: 課題となっている行動

- 食事を投げる
- 空の食器を投げる

③ C: 事後 (行動の結果)

- 「残してもいいんだよ」と職員が声を掛ける。
- 職員が片付けるのを見ながら、落ち着かず歩き回る。
- 食事を食べなくて済む。

⑤ 事前の対応の工夫

- 遊びだしたり、ペースが落ちた際にすぐ声を掛けられるように近くで見守る
- 残飯を入れるものを用意する
- 食事量を減らす

④ 望ましい行動

- 食べられない食事を残飯入れに入れる
- ↓変更
- 食べられない食事を職員に渡す

⑥ ほめ方・楽しい活動

- 食べられない食事を残飯入れに入れることができたときは、褒めて関わりを持つ

冰山モデル

課題となっている行動

食事・食器を投げてしまう

(本人の特性)

- 本人のタイミングがずれると不安定になり怒る。待つことが苦手
- 話し言葉はかみ合わないが、行動はかみ合う
- 相手の言葉をそのまま繰り返す(エコラリア)
- 言葉で気持ちを伝えることができない
- 行動や仕草などで自分の気持ちを表す

(環境・状況)

- 職員は距離を取って見守っている
- 職員からのコミュニケーションは言葉が多く、たまにジェスチャー
- 食事の量は多い気もする
- 活動、食事の場所が一緒
- 部屋の真ん中が席になっており、食器を投げると周囲の人に危険がある

必要なサポート

支援のアイデア

- 本人が発信しやすいツールを(文章、単語、絵、写真、シンボル、具体物など)提供する(やりとりの視点・見え方の視点)
- 始まりや終わりをわかりやすいようにする(時間の視点・場所の視点)
- 視覚的なツールでやり取りができるようにする(やりとりの視点・見え方の視点)

本人の強み→活かせる場面・状況

- 人とかかわりが好き。介助なしで食べることができる。言葉の理解はある程度(単語)ある。調子の良い時は意思疎通ができる。



- ① 職員は近くにおいて箸が止まった時やおかずで遊びだしたタイミングで声をかける
- ② 食事量を少なくして調整
- ③ 残飯を入れる物を用意する

1) 介入期Ⅰ

エリさんは、食事をもう食べたくないという表現を言葉で発信することは苦手です。しかし、おかずで遊びだしたり、食べるペースが遅くなったりと行動で発信してくれています。また、職員もその発信に気がつくことができていました。そこで、そのような行動が出たときにすぐ対応し、職員からエリさんに「ごちそうさまですか？」と声をかけてもらい、残った食事を残飯入れと一緒に捨てるようにしてもらった計画を立てました。食事の残し方がわからないのではないかという推測から、投げて終わらすのではなく、残飯入れに入れて終わりにできるように方法を覚えてもらうことを目的に支援を組み立てました。

しかし、支援に取り組む前の打ち合わせで、残飯入れにエリさんが入れるよりも、職員が近くにおいて、食器を受け取る方法がわかりやすいのではないかと、という意見が職員から出されたため、方法を変更し支援を行いました。

エリさんの食べるペースが遅くなったタイミングや遊びだしたタイミングで声を掛け、手を差し出すと食器を渡してくれるようになりました。

2) 介入期Ⅱ

職員に食器を渡すことで食事が終了できることが少しずつ理解できるようになり、食器を自ら差し出す行動も見られるようになってきました。この頃には食器を投げてしまうことはかなり少なくなってきました。

支援を開始してすぐに、職員から「うちの事業所の食事は全体的に多いのかもしれない」との意見がありました。そこで、食事量の調整が課題として出てきました。そして、食事の量をエリさんの食べられる量に調整しました。さらに支援の中で、みそ汁にご飯や料理を混ぜる行動が見られました。みそ汁に料理を混ぜる行動があった時に食器や食事を投げてしまうことが多いことに気が付きました。そこで、みそ汁の汁を少なくして具を多めにすると工夫をしました。



エリさんの食事量を少なくして汁物の具を多く変更した食事の様子

支援経過

職員が本人の「もう食事はいらぬ」という行動が出た際に食器をすぐに受け取るようにしたことと、食事量の調整をしたことで、食事や食器を投げてしまう行動は無くなっていきました。

本人の些細な行動を読み取ることは、エリさんの対応に慣れた職員だからできるという側面もあります。そのため、自分で食事を終わることができるようにする流れを支援する必要があると思います。



しかし現状では、投げる事が無くなっていることもあり、この方法で継続して支援を行っています。

エリさんは、3か所の生活介護事業所を日替わりで利用していることもあり、各施設での支援統一も必要だと感じました。そこで、相談支援、3か所の生活介護事業所、お母様、専門支援員でケア会議を開催しました。会議の中で、各事業所の現在の支援や課題などを出し合いました。各事業所の職員体制なども違い、まったく同じやり方の支援は、難しいところもありましたが、お互いの事業所で上手くいっている支援や上手くいっていない支援を共有することができ、それぞれの施設で支援の参考にできる話し合いができました。また、不安を抱える家族のサポートという意味において、各事業所が、お母様の想いを共有できたことは大きく意味があったと思います。お母様からは「多くの方に参加してもらい、話し合いができたことは、とてもありがたいです」と安心した様子で話されていました。

まとめ

食事や食器を投げてしまう行動に対しての支援ですが、「なぜ投げるのか？」をエリさんの特性（うまく言葉で伝えることができない）と行動（途中からペースが落ちる・おかずで遊んでいる）から、どうしたら食事を終わらすことができるのかわからずエリさんは困っているのではないかと仮説を立てて支援をしてきました。

その中で、今までは、物を投げられてしまう怖さから職員がエリさんと距離を取ってしまい、エリさんが訴えたくても訴えられない悪循環の状況があったと思います。

しかし、仮説を立て、エリさんが食事や食器を投げてしまう理由が、食事を残す方法がわからず困っていたことがわかってくると、職員もエリさんに対する怖さが薄れてきたと話されていました。

今回は、行動問題の裏にある本人の特性や困りごとを推測して、仮説を立てることで職員とエリさんの距離や信頼関係が近づいたことが、支援が上手く行った大きな要因ではなかったかなと思います。

支援経過のところでも書きましたが、最終的にはエリさんが自分で食事を終わらせることができるように支援をしていくことが望ましいのではないかと思います。なぜなら、自分で終わる方法を身につければ、相手に合わせることなく自分の良いタイミングで、終わることができ、ストレスも大きく減ることが予測できます。

エリさんの食事の支援は上手くいったと思います。しかし、まだ他の行動問題でエリさん自身、ご家族、職員の方が困っている現状があります。行動問題の裏にある困りごとに着目し、関係するみなさんが、エリさんの思いに寄り添いながらみんなで考え支援を行っていくことが大切だと思います。

ストラテジーシート

課題となっている行動

[Blank box for the main topic]

② A: 事前 (きっかけ)

[Blank box for A:事前 (きっかけ)]

① B: 課題となっている行動

[Blank box for B:課題となっている行動]

③ C: 事後 (行動の結果)

[Blank box for C:事後 (行動の結果)]

⑤ 事前の対応の工夫

[Blank box for ⑤ 事前の対応の工夫]

④ 望ましい行動

[Blank box for ④ 望ましい行動]

⑥ ほめ方・楽しいな活動

[Blank box for ⑥ ほめ方・楽しいな活動]

冰山モデル

課題となっている行動

[Blank box for the main topic]

(本人の特性)

[Blank box for (本人の特性)]

(環境・状況)

[Blank box for (環境・状況)]

必要なサポート



強度行動障害者の支援に係る本市のその他の取り組み

本市では、強度行動障害者の支援を促進するため、各種補助事業や講演会の開催等を行っています。ぜひご活用ください。

●強度行動障害者受入補助金

事業内容 事業所における強度行動障害者の受入れをより一層促進するため、人件費等を補助するもの。

補助額等 【補助要件】

- ① 定員に対する強度行動障害者の受入割合 20% 以上
- ② 人員配置体制加算ⅠもしくはⅡを算定していない
- ③ 直接処遇職員を「強度行動障害者の受入人数×0.2人」以上、人員配置基準人数に加えて配置人員配置体制加算Ⅲの算定事業所は、加算要件の人員配置基準に加えて「強度行動障害者の受入人数×0.2人」以上配置
- ④ 行動障害軽減のためのケース会議を月1回以上
- ⑤ 強度行動障害者専門支援員派遣事業の利用

【補助基準額】

強度行動障害者1人当たり 2,000円/日 ※重度障害者支援加算（個人加算あり）の場合は対象外

対象事業所 生活介護事業所（障害者支援施設に併設した生活介護事業所を含む）

●強度行動障害者受入環境整備補助金

事業内容 強度行動障害者の受入れに必要な環境整備を行うために必要な工事等に係る経費の一部を補助するもの。

補助額等 【補助対象・要件】

- ① 強度行動障害者の円滑な受け入れに必要な工事等
- ② 強度行動障害者専門支援員派遣事業の利用

〔工事例〕

- ・壁の衝撃吸収材化
- ・ガラスの亚克力板への取り換え
- ・その他、受入れに必要な備品等の購入等

【補助額】

補助対象経費の実支出額×3/4と補助基準額（600千円）とを比較して少ない方の額

対象事業所 障害者支援施設、グループホーム、生活介護事業所 等

●強度行動障害者支援事業講演会

強度行動障害者の基本的な理解から先進的な支援技術まで、講師の方からお話いただくとともに、専門支援員による実際の派遣事例など、具体的な取り組みについて講演しました。視聴無料です。ぜひご覧ください。

<第1部> 『強度行動障害の理解と実践の取り組み』

～強度行動障害の特性と行動障害が起きるメカニズム・実践的な取り組みについて～

■講師：社会福祉法人大府福祉会たくと大府 施設長 林大輔様

<第2部> ① 『名古屋市強度行動障害者支援事業とは？』

② 『強度行動障害者専門支援員派遣事業を利用して』

③ 『強度行動障害者専門支援員派遣事業の取り組み』

詳細は、ウェルネットなごやのホームページをご確認ください。

ウェルネットなごや「名古屋市の障害者福祉施策」
| 名古屋市強度行動障害者支援事業

<https://www.kaigo-wel.city.nagoya.jp/view/wel/fukushi/kyokoshien.html>



ウェルネットなごや



支援員の似顔絵イラストを描いていただきました！



つゆはし作業所 福富賢治さん

今年74歳になる賢治さんは作業所最高齢です。今も毎日施設外で清掃作業を行い第1線で活躍しておられます。どんなことにも挑戦したいという思いを強くお持ちで、私達に多くの学びを与えて下さいます。

強度行動障害者 専門支援員の紹介

社会福祉法人ゆたか福祉会
ライフサポートゆたか

今治 信一郎

障害のある人とのかかわりを通してたくさんのことを教えて頂きました。

改めてこの仕事の原点は「障害当事者から学ぶ」だと思っています。

事業を通して、職員の皆さんと一緒に考えさせて頂く機会は私にとっても学びとなっています。



社会福祉法人よつ葉の会
上堀越グループホーム

山道 理乃

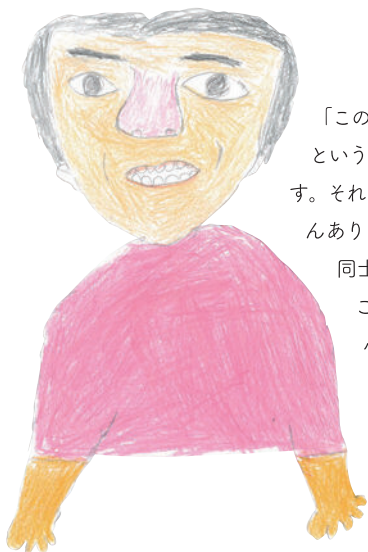
大学卒業後、よつ葉の会に入職して十数年がたちました。この事業にお誘いいただき、改めてASDの方への支援を学び、学ぶたびに奥が深いと感じています。まだまだ勉強中の身ではありますが、事業を通して得た出会いが、良いご縁となるように頑張っていきます。



社会福祉法人ひまわり福祉会
ひまわりの風

杉本 都

「この人をもっと知りたい」という思いからすべては始まります。それでもわからないことはたくさんあります。だからこそ、支援者同士が情報を共有するのです。この事業を通して、誰もが安心して暮らせるお手伝いできればと思っています。



社会福祉法人名北福祉会
めいほく鳩岡の家

西山 裕一

2021年10月から専門支援員として派遣事業に携わらせていただいています。利用者さん、職員さん共に困ってしまっている状況と一緒に解決して、皆が笑顔で過ごせるようお手伝いしていきたいと思っています。



社会福祉法人よつ葉の会
新福寺町相談支援センター

大川 善之

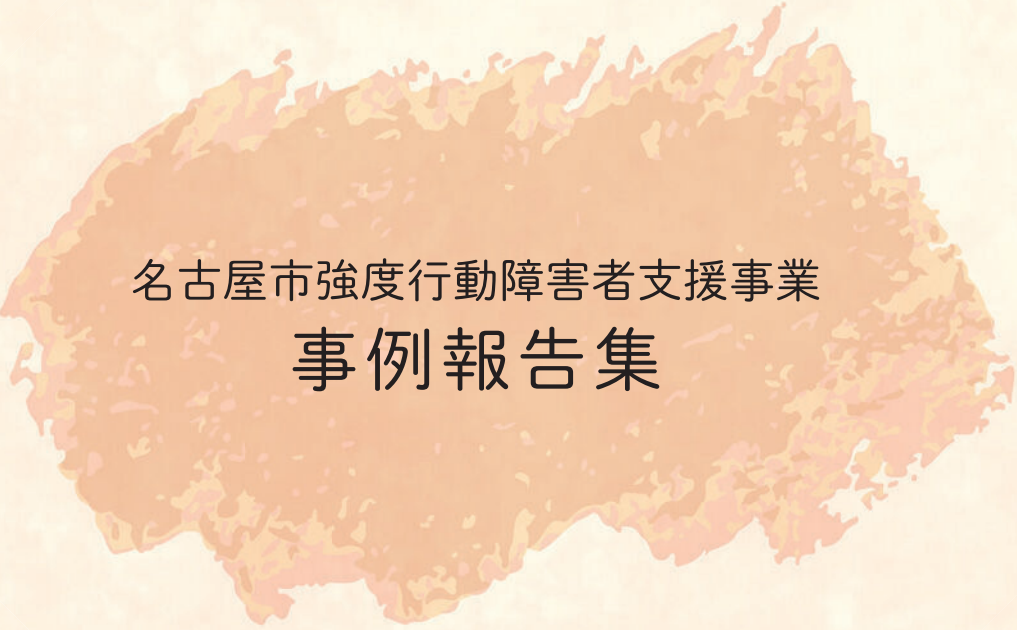
派遣依頼の事業所の方には、行動問題の利用者の気持ちになって、利用者が「どんな気持ち」で、「何をして欲しいのか」を想像することの重要性を伝えています。利用者主体の支援をしないと、行動問題は減らないと思います。



名古屋市
強度行動障害者支援事業事務局
市原 佳恵

2019年7月より強度行動障害者支援事業の事務局員として事業に携わらせて頂いています。この事業を通じて、行動障害のある方の生きづらさが解消され、毎日を笑顔で過ごせるよう間接的ではありますがお手伝いできればと思います。





名古屋市強度行動障害者支援事業 事例報告集

発行：名古屋市健康福祉局障害福祉部障害者支援課

編集：名古屋市強度行動障害者支援事業事務局

（名古屋市強度行動障害者支援事業事務局は、
名古屋市知的障害者福祉施設連絡協議会が
名古屋市より委託を受けて運営しています。）

2023年3月発行

— 事例集や事業に関するお問合せ先 —

名古屋市強度行動障害者支援事業事務局

TEL：052-613-7660 FAX：052-613-7688

E-mail:kyoko-shien@wing.ocn.ne.jp